

ラインホルト『哲学的諸学における

普遍的語法のための同義語論の基礎づけ』試訳（1）

栗原 拓也

はじめに

本稿はカール・レオンハルト・ラインホルト『哲学的諸学における普遍的語法のための同義語論の基礎づけ』（1812年）¹を翻訳する試みであり、初回となる本稿では冒頭より順に「献辞と序言」および「諸語の類義性と諸概念の同名性の観点からの哲学における語法の批判」を訳出した。

よく知られているように、『カント哲学についての書簡』（1790年）を携えて学界に登場したラインホルトは、その哲学者としてのキャリアにおいて数度にわたり自らの立場を転回している。具体的に言えば、カントの批判哲学、自身の根元哲学、フィヒテの知識学、バルディリの理性的实在論へと同意の対象を変えていったのであった。その一方で、バルディリに対する賛意を取り下げた後、晩年のラインホルトが言語批判的な著作を著したことはあまり知られておらず、注目されることも少なかったのではないだろうか。まさにそうした時期に属する著作の一つが、ここに訳出した『哲学的諸学における普遍的語法のための同義語論の基礎づけ』なのである²。

確かにラインホルトは自身の立脚点を変更し続けたものの、哲学が厳密な学として存立するために必要な基礎を究明するという彼の問題意識そのものは常に一貫していたと思われる。それは本書においても例外ではない。今回の訳出箇所からも読み取

¹ Carl Leonhard Reinhold, *Grundlegung einer Synonymik für den allgemeinen Sprachgebrauch in den philosophischen Wissenschaften*, Kiel, 1812. 本稿で底本としたのもこの初版である。原文における隔字体の箇所には傍点を付した（人名および書名を表記する際にも隔字体が用いられているが、これらについては読みやすさを考慮して傍点を付すことはしない）。

² 言語に関するラインホルトの論考としては、本書の後に書かれた次の著作も挙げられる。Carl Leonhard Reinhold, *Das menschliche Erkenntnißvermögen, aus dem Gesichtspunkte des durch die Wortsprache vermittelten Zusammenhangs zwischen der Sinnlichkeit und dem Denkvermögen*, Kiel, 1816. こちらの著作の詳細に関しては、下記の論文が参考となる。山口祐弘「ラインホルトの言語哲学」（『講座ドイツ観念論3 自我概念の新展開』所収）、弘文堂、1990年。

ることができるように、ここでラインホルトは、各人（ないし各学派）がそれぞれ異なる言語の使用法（語法）を用いているために哲学における重要な諸語が多義的になっており、それゆえに哲学の諸問題が解決されないのだと考えている。そこで彼は、言語と思考の関係を吟味しながら、重要な諸語の意味を一義的なものとする普遍的な言語の使用法を確定することで哲学にその基礎を与え、哲学から混迷を排除しようとするのである。

ラインホルトの言語批判に関する先駆的論文においてクレーレンは、いわば誰にとっても拘束性を持つような諸概念の類義語辞典を打ち立てようとするラインホルトの解決策それ自体はまったく不可能なものであると断じている³。それにも関わらず彼がラインホルトの「言語哲学」に注意を払うよう訴えるのは、その根底にあるラインホルトの問題意識や意図のうちに論理実証主義のそれと共通するものが見出されるからに他ならない⁴。クレーレンは、ラインホルト（およびグループ）の言語批判を根拠として、分析哲学は 20 世紀に入って突如として誕生したのではなく、すでに 18・19 世紀のドイツ哲学においてその基礎が用意されていたと主張する⁵。

この主張の正当性はひとまず置くとしても、言語に対する吟味の欠如がしばしば批判的に指摘されるカント以来のドイツ哲学において、本書がそうした試みの先駆けとして哲学史的な位置を占めていることは間違いない。それだけでなく、ラインホルトは本書の思想を、その生涯において立場を変え続けた彼がようやく辿り着いた終着点として提示している。こうした点を顧みるとき、本書には無視できない興味深さが秘められているように思われるのである。

³ Hermann-Josef Cloeren, *Philosophie als Sprachkritik bei K. L. Reinhold*, *Interpretative Bemerkungen zu seiner Spätphilosophie*, in: *Kant-Studien* 63, 1972, S. 235.

⁴ ただし、ラインホルトの目的はあくまでも言語の批判によって哲学における誤解や混乱を抑止することであり、論理実証主義のように形而上学を排除しようとするわけではない。また、こうした言語に対するラインホルトの問題意識が当時の哲学的状況や他の哲学者からの影響のもとに生まれたものであるという点にもクレーレンは注意を促している。Ibid., S. 228.

⁵ Ibid., S. 225, 236.

試訳

哲学的諸学における普遍的語法のための同義語論の基礎づけ

カール・レオンハルト・ラインホルト

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービに

献辞と序言

『フィヒテ宛て公開書簡』（ハンプルク、ペルテス書店、1799年）⁶「序言」の結びに置かれた献辞の中で、君はこう書いていた。君にこの書簡を公表するよう促した私は、君が書簡をめぐって論難されたときには身を挺してその災厄から守り、かつてソクラテスが年下の者たちにそうしたように、論争の渦から年長の仲間である君を肩に担いで救い出さなければならない、と。

君が論難されなかったことは、私にとって幸運であった。というのも、私の肩が十分に頑強であって、親愛なる重荷を担いでどこへ向かったとしても、私は至るところで論争の渦に出くわすか、そのきっかけになったであろうから。

君を救い出しに行く必要はなかったのであり、私にはその能力もなかったであろうが、私自身の運命によって形而上学の戦場の上で私には助けがいつそう必要となり、君の助力によってそれはいつそう完全な仕方ですら私に与えられたのであった。君の献辞が冗談半分で私に求めたものについて、いま私の献辞は真剣に君に感謝を述べなければならない。

本営や批判哲学の信仰者、絶対者の現代的預言者らによる記事は、敗北を繰り返した後の私の破滅をとうの昔に伝えている。そして君自身は、理性と知性、信と知についての古くからの混同へ逆戻りする不治の病にかかり、ついにはかつてよりも明白に「空虚な形式主義、単なる論理学による不可能な哲学」のために闘っている仲間を、とうとう沈黙のうちに見放したように思われる——かつてというのは、私が健康で、いつも君の肩に担がれては論争の渦から救い出され、確固とした、確実で、いかなる論争も起こりえないし不要であった基礎と地盤に置かれていた頃のことである。

重要な示唆によって君はとうの昔にこの未踏の基礎と地盤のある地を指し示して

⁶ 本書には下記の邦訳がある。栗原隆、阿部ふく子訳「フィヒテ宛て公開書簡」、『知のトポス』（新潟大学人文学部哲学・人間学研究会）第9号、2014年。

いたのであるが、ようやく私はそれを理解するようになった。とりわけ『アルヴィル』（ケーニヒスベルク、1792 年）の内容豊かな「付録、エルハルト・O への書簡」ではこのように言われている。

「ついに声を大にして述べるのが許されるのであれば、このように言おう。いよいよ私にとって哲学史は、理性と言語がそこで『メナエクス兄弟』⁷を演じる戯曲となってきた。この風変わりな戯曲にはカタストロフィ、結末があるのだろうか。それとも、新たなエピソードが付け加えられていくのだろうか。見る目のある人々がいまや揃って偉大であると呼ぶ或る者（ケーニヒスベルクの哲学者）は、この芝居の紛糾の経過を探究し、一つの結末を見抜いたようだった。多くの者は、この結末が今日ではすでに見出されており、よく知られていると主張している」。

こうした主張は、カントが学としての哲学の可能性をはっきりと論じて以来、頻繁になされるようになった。カント以降に現れた相互に導き合ったり排除し合ったりする諸体系のうちの一つに満足し、それゆえに哲学の課題が解決可能であると考えただけでなく、現実には解決されたのだと見なした人々が、このように主張したのである。とりわけ私自身が、この時期には四度にわたってかの軽率な主張をする誤りを犯した。すなわち、純粋理性についてのカントの批判に始まり、表象能力についての私の理論、フィヒテの知識学、最後にはバルディリの第一論理学要綱に対して、私は喜びに満ちた確信を抱いて「エウレカ！」と声を上げたのであった。

しかし、『メナエクス兄弟』は引き続き上演されたのであり、いまでも上演され続けている。現在ではもう観客もほとんどいないまま上演されている長丁場の戯曲は、ますます退屈で、理解できぬ、愚鈍なものになっていくと思われる。この状況は、その戯曲の主要な登場人物の一人、すなわち言語が常に舞台の裏で秘密の演劇を行っている限り、そして理性がその扮装を変えながら舞台に登場するも、批判者、演繹者、設計者、実演者、再批判者として、古い誤解およびそのあらゆる紛糾の本来の扇動者である言語をその隠れ家から舞台の上へ引きずり出すことに成功しない限り、変わることがないだろう。

この演劇がそのようにしてのみ結末に至るか、あるいは決して結末に至らないということ、そしてこの演劇によって一方では駆り立てられ、一方では水泡に帰した期待がただそのようにしてのみ予期せぬ、根本的かつふさわしい方法で満足させられうる

⁷ ブラウトゥスの作品で、双子の取り違えを題材とした喜劇である。

（そして、そうでなければならない）ということ、君は以下の箇所ですべての言葉によってはっきりと先んじて述べていたのである。

「そして、我々みな形而上学について意見を一致させるためには、理性のメタ批判であるような言語の批判だけが欠けている」⁸。

この批判は、いまなお欠けている。そして、今日までそれが哲学には欠けているために、哲学はその第一の課題について、哲学の弁護人たちにおいて意見が分かれたままなのである。同じ理由により、真理の探究者は真なる確実性についての求めている根拠や確実な真理を無益に探すこととなった。さらにまた同じ理由で、理性の批判による経験と良心、表象能力の理論による意識、知識学による自己意識、バルディリの論理学による思考としての思考、同一性体系による絶対的直観などが、同等の無益さを伴って提出されたのである。

前述の言語批判を遂行しなかったこれらすべての体系によっては、哲学者たちの第一の課題の意義について彼らを争わせてきた古い誤解は、その本来の基礎においては決して暴かれず、むしろ常にただ隠されて、人目を忍んで流布されていくこととなった。それというもの、この基礎は気づかれていないが気づけないわけではない、語法の変遷性と多義性の影響のうちにあり、その影響によって思考に仕えるべき言葉が思考を支配し、理性をその道具である言語に特有な変遷性と従属性のうちに引きずり込むからである。

しばしば君はこの病に的確な名前を付けていたが、最も的確だったのは「理性を支配する文字の本能」という呼び名である。

君がこの本能を遺伝する病——それは「何が、いかにして真理であるのか」を知ろうと望むものとしての哲学がかかっている病である——と説明したことについて、私は十分な確信をもって君に同意する。しかし、君が次のように考えているならば、同様に十分な確信をもって君に反論しなければならないだろう。すなわち、真理を究明するための努力によるこれまでの成果だけでなく、この努力そのものが上述の遺伝する病の帰結であり、その病ゆえに哲学は決して救済されえないか、無知および無知を望むことをはっきりと告白する信によってのみ救済されうるかのいずれかであると考えているならば。

君と同じく、私も真理への根源的な信を、いかなる哲学によっても産出できず、埋

⁸ Friedrich Heinrich Jacobi, *Friedrich Heinrich Jacobi's Werke*, Bd. 1, Leipzig, 1812, 252f.

め合わせることもできない神の賜物として認めている。そして、それ自身においてさえ意見が一致していない哲学がときにこの信を基礎づけようとして用い、ときにその基礎を破壊しようとして用いてきた誤った知と、この信が昔から戦ってきたことを私は知っている。また、それ自身において意見が一致している信の根絶不可能性やそれ自身において意見が一致していない知の維持不可能性のもとでは、いかなる知の体系も長きにわたって存続したことはなく、存続しえないということも知っている。しかし、次の疑問がますます退けがたく私の心に浮かぶのである。すなわち、それにもかかわらずなぜ、これらの諸体系の各々はそれが倒壊するとすぐに別の形をとってまた新たなものとして築かれるのか。なぜ懷疑論と独断論、唯物論と観念論、これらの諸見解の協力者と反対者は、常に衣装を変えながら姿を現してきたのか、そしてなぜそうしなくてはならないのか。

この問いに対して、私は君とともに「言語の批判が欠けている」からだと答える。真理への信がこの批判を欠いたままで何を成し遂げられてきたのかは、これまでの哲学史が証言している。しかし、その信がこの批判とともに、この批判によって、何を成し遂げられるのであろうかは、まず確かめられる必要がある。君はこの病の性質とそれに対するまだ一度も試されたことのない治療薬を提示したので、それが不治の病ではないと見なすことができる。そして、文字に対する君の熱意はただ本能的な支配にのみ向けられており、文字の思慮深く相応な奉仕には決して向けられることがない。もし君が、自らを精神と称する文字を嘘だと咎めるならば、やはり君は文字なしで済ますことができると信じている精神を決して誤謬から解放しないのである。精神と文字の混同が、君が単なる文字の精神と呼ぶ誤った知を形成するならば、精神は、それを分離しない差異と、精神に従属する文字との混ざらない連関においては、まさに真なる知の本質そのものを形成するのである。

これまで哲学史という戯曲にはいかなるカタストロフィもなかったのであり、その戯曲の各々の進展は常に新たな紛糾にすぎなかった。なぜならば、そうした各々の進展は根本において、様々かつ相互に戦い合っている、特殊な(個別的な)語法の間で、そして多義的かつ共通的な(通俗的な)語法の無意識の支配のもとで行われ、それゆえに終結させられえない終わりのなき争いにおける休戦にすぎなかった(そして、そうでしかありえなかった)からである。

各々の特殊な語法および共通的語法から区別されるべき普遍的語法は、ときに両者のいずれかと、ときに語法一般と名付けられた両者の混交物と混同され、取り違えら

れてきた。闘士たちは普遍的語法のために戦っているのだと信じているが、各自が自分の語法を普遍的なものに見なしているか、あるいはやはりそれを普遍的語法という地位に昇格させようとしているのである。そうしている間に、偏見のない観客のための本当の普遍的語法はますます不確実で謎めいたものとなっている。この語法そのものがまだ議論の余地を残す、不確定で問題含みのものであり、ただ行き当たりばったりで探されているか、あるいは不可能なものに見なされている限りは、言うまでもなくそれが共闘し勝利することはできない。しかし、この語法は、実際にはただ相互に争っているにすぎない特殊な語法や、それらの争いを起こした張本人、すなわち共通語法に関して争うことなく勝利するのである。それは必ず、真の確実性の根拠を問う各々の学者において次第に勝利を収めていくようになるが、それはこの語法がまずこの学者たちの一人ないし数人において判明に意識され、一度どこかでついにはっきりと公に述べられるや否やのことである。

哲学は今日までいかなる普遍的語法も持たず、見知ってもいない。哲学は形而上学において、あるいはいわゆる思弁的哲学においては、ただ特殊な、相互に逸脱し合い、相互に矛盾し合う語法だけを提示するが、遍く認められた⁹論理学においてはしかし、共通語法だけを提示する。確かにこの共通語法は普遍的語法を自称するが、それはすでに自らの共通性を、相互に争い合う諸語法の各々の意味に合わせてそれが歪曲され、解釈されることによって、立証しているのである。ここにおいても、哲学に出自を持ち、それによって哲学の基盤と学問性が今日まで議論の余地のあるものとなっている表現の多義性と恣意性が存立している。

この多義性と恣意性は、次のような理由から不可避で克服できないものと見なされている。すなわち、数学的諸学および外的経験に関係するあらゆる学では、周知のご

⁹ ここで「遍く認められた」と訳出した語は「allgemeingeltend」であり、以下の研究において用いられている訳語を参照させて頂いた。田端信廣『ラインホルト哲学研究序説』、萌書房、2015年。田端によれば、ラインホルトはこの「遍く認められた」という語を「普遍妥当的（allgemeingültig）」から区別して、諸著作で使用している（同書、141-143頁）。ラインホルト自身はこの区別を、例えば以下のように説明している。「哲学における遍く認められた原理は、次の点によって普遍妥当的原理から区別される。すなわち、前者は後者のように、その原理を理解するあらゆる人々によって真であると認定されるだけでなく、また健全で哲学する頭脳を持つあらゆる人々によって現実に理解されるという点で区別されるのである。哲学者たちのもとでまだ遍く認められてはいない或る認識が、それ自体において普遍妥当的であるということは、もちろんありうる」（Karl Leonhard Reinhold, *Versuch einer neuen Theorie des menschlichen Vorstellungsvermögen*, Prag und Jena, 1789, S. 71）。そして「普遍妥当的原理の普遍妥当性は、それが現実に遍く認められるようになることによって実証される」（Ibid., S. 142）と言われる。

とく、図形や数字、像、感覚的知覚のうちに存する言葉の意味の支持物を利用できるが、哲学は自らの言葉の意味についてそのような支持物を断念しなければならない、という理由である。この仮象的な説明根拠に眩惑されると、学問的な哲学は像を欠く言葉による以外の表現には適さず、必要ともしないということが、いっそう考慮されなくなってしまう。そして、哲学における確固とした語法の欠如には、哲学の言葉が持つ像を欠くという性質以外にも、まったく別の根拠がありうる（そして、なければならない）ということも推察されないことになる。

それにもかかわらず、このまったく別の根拠と、君によってその欠如が気づかれ要求された言語批判の第一の課題は、私たちのきわめて身近にあり、おそらくあまりにも身近にありすぎたために深く高く研究してきた者たちに看過されてきたのである。この根拠は明晰かつ判明に、反論の余地なく示されうるが、それは従来の通例的で気づかれていないが気づけないわけではない、類義的諸語（同義語）および同名的諸概念（同名異義語）——まさにこれらが遍く認められる論理学の不可欠かつ広く用いられている、お馴染みの諸語と諸概念をなすのである——の意味の混同において示されるのである。しかし、それらの特有的な意味は常にすでに知られたもの、自明であるものとして暗黙裡に前提されるのみで、意識においてはつきりと述べられることは決してなく、それゆえ常にただ非判明に表象されている。

広く親しまれている最良の例として、普遍性という語が挙げられる。この語は、一方では一性という語——それが個別性と同意味で用いられていない場合——と、しかし他方では共有性という語と類義性を持つものとされており、その類義性はこれまでほとんど、あるいはまったく気かけられてこなかった。これらの類義的な三語の意味が自明なものとして、探究されることなく暗黙裡に前提されている間に、普遍性という語は論理学の内外において、ときには普遍性の上に立つより高いものである一性と、ときにはしかし普遍性の下にあるより低いものである共有性と取り違えられ、同意味に用いられているのである。その際、一性それ自体の特有性は無視され誤認されているのであり、一性それ自体はそのようなものとして一様性や個別性、数多性の上に立ち、それゆえまた全体性、同等性、普遍性の上に立つ（そして、立つのでなければならない）ものであって、一性の下にあるにすぎないこれらの性格のいかなるものとも混乱と矛盾なしにはまったく同じものではありえず、そう呼ばれることもできない。同様に普遍性の特有性も無視され誤認されているのであり、その特有性はそれが一性それ自体のうちに存するのではないのと同様に一様性、そしてまた単なる全体性

のうちに存するのではなく、全体性と同等性の連関（区別する合一）のうちに存するのである。最後に共有性の特有性も無視され誤認されているのであり、その特有性は特殊なものにおける類似性のうちに存するのである。共有性は確かにその上に立つ普遍性と不可分であり、それゆえ普遍性に付き従うのでなければならない。しかしそれはまた、普遍性と混合しうるものではなく、ただ混乱し矛盾した表象によってのみ普遍性と混同され、同意味のものとして用いられうるのである。

普遍的と共有的という同義語の本来の意味がはっきりと述べられ、それによつてはじめて判明なものになった後で、共通的という同名異義語の本来の意味も明らかとなる。この語は上述の二つの同義語の綴りとしての構成要素をなし¹⁰、その同名性によってこれら二つの語は同じことを意味しているように見える。しかし、これらの語は決して同じことを意味しえず、普遍的という語は普遍的なものにおける同じものだけを、共有的という語は特殊なものにおける類似的なものだけを意味するのでなければならない。

これに続いて、純粹な（本来的な）普遍性と経験的な（非本来的な）普遍性における普遍という同名異義語の特有的な意味についても論じられ、判明なものとなる。純粹な普遍性において普遍という語は、その下にある共有性から区別された普遍性、すなわち同じものの全体性を意味する。これに対して経験的な普遍性においてそれは、その上に立つ普遍性から区別された共有性、すなわち特殊なものにおける類似性を意味する。共有性とは混合しえない本来的な普遍性から不可分なものとして、共有性は経験においてその普遍性の類比物を形成し、その名前を借用するのである。すなわち、経験的という添え名をもつ普遍性——それはしかし、混乱し矛盾した表象によってのみ純粹で本来的な普遍性へと移行しうるものであり、非論理的な包摂によってのみそのような普遍性に取り入れられ、併合され、意識において同等に扱われ、一様化され、無差別化されうるのである。

論理学における共通的語法により、そしてそれゆえにまた形而上学における特殊な語法により、普遍性という語が濫用されたこと、そして今日ではこれまで以上に濫用されていることに関する前述の発見と訂正の後には、予期せぬ、しかしそれゆえに反論の余地もなく、検討に値する論理的な新事項も自ずから明らかとなる。すなわち、

¹⁰ 「共通的」と訳した単語は「gemein」であるが、この「gemein」という綴りが「普遍的」と訳した「allgemein」および「共有的」と訳した「gemeinschaftlich」に含まれていることを指している。

従来の通例的な普遍性一般の概念や、純粋な普遍性と経験的普遍性について、すなわち本来的な普遍性と共有性について憶測された共有的なもの、同じものの全体性と特殊なものの類似性について憶測された同じもの、そしてより高い普遍性として純粋な普遍性と経験的普遍性の上に立ち、その下にそれらの普遍性が並立するものとして憶測された類などといった、言うなれば形式的普遍性は、決して論理的なものではなく、証明可能な非論理的な不合理であり、単なる弁証法的なまやかし——論理的なものと類比的なものの混乱した混交にすぎない。それは普遍的と共有的という同義語および純粋な普遍性と経験的普遍性における普遍的という同名異義語の特有的な意味を無視して混同することによってのみ生じ、存続するのであり、証明可能な誤りのある語法から発しているのであるが、その語法に遍く認められた論理学はとりつかれており、その語法の共通性にこの論理学はその遍く認められる性質を負わなければならないのである。

しかし、上述の論理学のその他の諸形式性または思考形式にもまさに同じ事情がある。とりわけ、以下のものがそうである。

形式的・一性は、一性と一様性という類義的諸語および一性それ自体における一、一様性、および個別性という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同することによって存立する。

形式的差異は、差異と相違という類義的諸語および非分離的差異における差異と分離的差異における差異という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同することによって存立する。

形式的合一は、不可分離性、連関、合一という類義的諸語および非混合的合一における合一と混合的合一における合一という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同することによって存立する。

形式的有は、現実性と可能性という類義的諸語および可能的有における有と現実的有における有という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同することによって存立する。

形式的本質は、根源的本質、諸物の本質、個別的本質という類義的諸語およびこれらの三つにおける本質という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同することによって存立する。

形式的確実性は、意識と確実性という類義的諸語および純粋な確実性における確実性と経験的確実性における確実性という同名的諸語の特有的意味を無視し、混同する

ことによって存立する。

形式的論理学の上述の、そして他のあらゆる形式性、思考形式、思考法則において、その形式的なものは誤解された同名性に他ならず、そのもとで同音的なものが同意味のものだと思なされ、しるしづける文字の無差異性がその文字によってしるしづけられる概念の同様性と見なされ、語の一樣性がそれにもかかわらずただ親縁的であるにすぎないその意味の一樣性と見なされているのである——その原因は、これらの意味の特有性が周知のものとして暗黙裡に前提され、はっきりとは述べられず、判明な知覚から逃れ、ただ混乱して意識に達していることにある。「言葉は何事においても本質の前に進み出てくる——そのために、本質はそれ以上顧みられず、すべては言葉とともに成し遂げることができるのだと人々は魔術師のように称し、また自分自身に対してもそう説き伏せている。実際のところはしかし、言明の根拠だけでなく言明そのものが失われているのである。というのも、彼らが述べていることは無意味な戯言なのだから」（F. H. ヤコービ『神的事物とその啓示について』、216頁）。

論理学において不可欠で、広く用いられ、お馴染みとなっている諸同義語と同名異義語の特有的な意味がはっきりと述べられ、判明に知覚され、それらの特有性において認識されるようになってはじめて、論理学における共通的語法の無意識的支配と、この支配のもとでのみ、そしてそれによってのみ不可避であった形而上学における特殊な語法同士の衝突が止みうる（そして、止まなければならない）のであり、哲学における普遍的語法が始まることできる（そして、始まらねばならない）。哲学における普遍的語法において、そしてそれによって、現実的な学としての哲学が、この学という語の真の意味において現れるだろう。それゆえ、哲学という『メナエクス兄弟』のカタストロフィはただ言語の批判においてのみ存立しうる。そしてそれゆえ、この批判の最初の仕事——知ることを欲するがいまだ知ることができていない哲学者が取り組むことを止め、知る者が取り組み始めた仕事——は、上述の最も重要な諸同義語と同名異義語の説明的な目録を打ち立てなければならない。

この目録の内容を構成すべき語の説明が、共通的語法や何らかの特殊な語法が言わんとすることから取られてきてはならないということは自明である——また、説明しかつ説明されるべき諸語は、共通的語法の内容を欠いた未規定性や、何らかの特殊であるにすぎない語法の恣意的な規定性において受け入れられ、用いられてはならないということも自明である——そして、この仕事全体において形式的論理学も何らかの形而上学的体系も確定したものとして根底に置かれてはならないということも自明

である。しかし、まさにそのために、打ち立てられるべき、普遍的語法を述べる語の説明（例として上述した普遍性と共有性という語の説明のように）は、それがはっきりと述べられることによるだけですでに理解できるものでなければならない。各々の語の説明は、自らの母語にただ或る程度の親しみがあリ、説明されるべき諸語のこれまでは注意してこなかった同義性および同名異義性に気づいた各々の学者にとっては、それ自体で納得のゆくものでなければならず、その限りにおいて自明的でなければならないのである。

類義的諸語と同名的諸概念の最も重要な家族を介して導かれた同義語論の最も主要な成果は、ようやく判明になりつつあって、もはや誤解を招くことのない純粋な認識の区別——すなわち純粋な認識を、それ以上純粋な認識を分離しない差異と、経験的な認識とのそれ以上混合しない連関とに区別すること——と、ついに獲得され、真正の知となった次の洞察である。すなわち、純粋な認識の特有性は普遍における真なるものだけであるが、経験的認識の特有性は特殊における蓋然的なものだけでありうる（そして、そうでなければならない）ということ——そして、まさにそのために特殊なもの、そしてその経験的普遍性と個別性において常にただ蓋然的なものは、確かにそれの上に立つ純粋で本来的な普遍から不可分なものとして、それに従うのでなければならないのであるが、またそのような普遍性と混合しないものとしてはただ混乱し矛盾した表象によってのみそれに移行し、取り入れられ、併合されうるということ——そして、純粋なものと経験的なものの混乱した相互前提と否定、その相互の導出、相互に由来を帰すこと、同様に両者についての現代的な無差別化は、共有的と称されるものの仮象のもとに両者の特有性を混同する無視、一方を他方のものと同様に見る誤認に他ならないということが、その獲得された洞察である。

純粋な認識と経験的認識の真の関係は昔から、人間精神の真の健全さをなす良心性において、超感性的なものを普遍における或る種の真なるものとして最初に指示するものである良心の特有性によって、そして感覚的なもの——前者と比較すれば特殊における蓋然的なものにすぎない——を最初に意識にもたらすものである経験の特有性によって、感じられてきた。上述の関係は哲学において、ア・プリオリとア・ポステリオリという従来的な名称によって昔から示唆され、究明を試みられてきたのである。しかし、形而上学の特殊な語法の間で争いが行われている間に、この術語は各体系において別の意味を持つようになり、その限りにおいてこの術語の特有的で変遷することのない真の意味は問題含みで、議論の余地が残るものにとどまらざるをえなか

った。また、その限りにおいて、その際に前提された諸根本概念は多義的な同義語と同名異義語によってのみしるしづけられたのである。さらにまた、その限りにおいて、これらのしるしづけの同義性と同名異義性は暗闇のうちにあり、それゆえに、他のどの語法よりも思考論と存在論の思考記号にふさわしい普遍的語法も、共通的語法の支配と特殊な諸語法との争いによって、知覚する意識から引き離され、抑留されることになってしまった。

そして、その限りにおいて、哲学においてはついに明らかとなりつつある次のような不合理が支配し、人を欺いてきたのである。すなわち、ア・プリオリとア・ポステリオリについて、純粋なもの[・]と経験的なもの[・]について、普遍的なもの[・]と共有的なもの[・]について、同じものの全体性と特殊なもの[・]の類似性について、共有的なもの[・]があるという不合理である。同様に、次のようなそれ以上誤認されえない妄想も支配し、人を欺いてきた。すなわち、真理一般[・]についての妄想、真理の類[・]と称されるもの——そのもとで、ある種の真理と蓋然性は真理の様々な種、種類、変種として並立しなければならない——についての妄想である。また同様に、ついに明らかとなりつつある形式的なもの[・]の形式性も支配し、人を欺いてきたのであるが、その形式的なものはその本質を内容の欠如のうちに持ち、次のような内容、すなわち形式の欠如のうちにその本質を持ち、両者の浸透のうちにその本質を持つ絶対的なもの[・]を導いてくるような内容を同時に否定しかつ前提するものである。

形式的真理[・]、論理的形式性[・]、形式的論理学[・]という弁証法的まやかしと同時に、絶対的真理[・]、形而上学的実在性[・]、実在化された形式性[・]という形而上学的まやかしも存立、消失する。この形而上学的まやかしは、哲学の始まりから今日に至るまできわめて多様な姿をとって、懷疑論、独断論、唯物論、観念論およびこれらの見解の反対者や協力者において真理の探究者たちを欺いてきたのであり、最近になってついに思弁的哲学の完全な成熟において絶対的無差別[・]としてはっきりと述べられ、そしてそれによってその根源的な姿において、その真の名前とともに自らの素性を明かしたのである。

したがって私の親愛なる読者である友よ、私が形式的論理学[・]によって不可能な哲学[・]を築こうとしているのではないか、私の現在の試みがなおいくらかは理性的実在論——バルディリの『第一論理学要綱』が出版されて以来、私が賛意を表明してきたもの——を擁護するのではないか、それゆえ私が主要な点においてときには同じ言葉で、ときには別の言葉で、1801年から1803年にかけてハンプルク（ペルテス書店）で出版された『寄稿集』において、続いて『入門書としての真理認識の始原諸根拠』（キー

ル、1808 年)、そして『哲学のもとでの重要な言語の混乱についての告発』(ヴァイマール、1809 年)においてすでに述べたこととまったく同じことだけを繰り返すのではないかと、これ以上心配することはない。後者の論文が君の手に届いた後、そこで告発されている混乱をより鋭敏に探究し直してはじめて、私には諸概念の同名性と諸語の類義性が、その混乱の直近のきっかけとして突如理解できるものになったのである。そして最初に私が学んだのは、『告発』および『入門』では形式主義に対して常に形式主義の密かな指導と支配のもとで、形式主義自身の武器を使用したことにより、主要な点において無益にのみ争ってしまったということと、その理由を洞察することであった。この気づきによって、私には最も厳密な意味での新たな試みが不可避となった。この試みにおいて私は、これまでの試みによって私が誤認していた真理に対する信と、私がその真理を無益に探してしまった理由についての判明な認識に対する信以上のいかなるものも根底に置くことができなかったのである。

私はこの試論を、君が先んじて言及して促した哲学的『メナエクス兄弟』のカタストロフィに対する最初の寄稿として、そして私のこれまでの学究および研究の最後かつ本来の成果として、君に献呈する。この試論とともに、私は自分の現世における経歴を、私の内的かつ外的召命の主要な仕事として若いころから心にかかっていた重要な事柄の主要点において締めくくる。私の経歴の大部分、君の『スピノザに関する書簡』がはじめて出版されてから最新作である『神的事物とその啓示について』に至るまでの間、私たちの語法はきわめて異なったものであり、私の語法は私の体系の転換に際してきわめて頻繁かつ大きく変化したけれども、私の精神が君の精神から離れることはなかった。私の企てを覚醒させ、活気づけ、訂正するうえで、君より持続的に私に良い影響を与えてくれる真理の探究者はいなかった。それは、真理の根源的感情とそれによって存立する信を比類なき気力と明晰性をもって擁護する君の哲学観の啓発的な特有性によるものであり、あらゆる懐疑的、独断的、そしてその両者の連携のうちに存する批判的な仮象の知に対する君のその方法においては唯一の反対によるものであり、私たちの長年にわたる友情の間に交わされた、精神と心を高揚させる君との会話や手紙におけるやり取りによるものであり、激励する賛意と戒めを与える非難によるものであった。そうした賛意と非難とともに、君は私の諸々の試みを、君がそれらのうちに見出した様々な無益さにも関わらず評価し続けたのである——君の助力によって私がついに到達した目標が、三十年にわたる努力の一つ一つの苦勞と私のこの世での生の一つ一つの苦悩を私に報いてからは、君の顔を見ることも、君

の手を握りながら感謝の念を伝えることもできなくなる時がそれだけいっそう近づいてきている。私たちがこの世で再会することはもうないだろう。天上では、よりいっそう確実に、永く、妨げられることもない。天に至る道の途中で私たちは出会い、友となった。その道の上にいま、君に献じるこの小さな、しかし願わくは後世に残り続ける、敬慕と親愛、そして謝意の碑が立っている。

君のラインホルト

※哲学を生業としているわけではなく、それゆえに論理的、形而上学的な探究に取り組むことに不慣れな読者には、確実なものと哲学的な知における真理の確実性の特有性についての議論（199頁の α ）と β ）から212頁のb）まで）および18世紀における気づき、注意、無視、注視、知覚についての注を、上述の導入的序言の本質的構成要素として、それゆえ序言に続く言語の批判等に進まれる前に、読んで頂くようお願いしたい。

諸語の類義性と諸概念の同名性の観点からの哲学における語法の批判

§1

思考と発話の関係

言葉が伝達のためだけでなく、人間的意識における思考の成立と持続のためにも不可欠であると考えるならば——特殊なものにおける個別的なものやその特殊性における特殊なものに関係し、直観と呼ばれる表象が像によって伝達されるのと同様に、個別的なものにおける普遍的なものや特殊なものにおける共有的なものに関係し、思考と呼ばれる表象が言葉によって伝達されると考えるならば——それゆえ、人間的意識における直観が本来の像や想像、模像、予像による表象に違いないのと同様に、人間的意識における思考とは特有的な思考記号や命名、発話、弁論による表象に違いないと考えるならば、思考と発話の連関はまったく明白であり、確定したものであるように思われる。

しかし、思考と発話の差異——これなしには両者のいずれもがその特有性において識別されえず、思考と発話の連関は両者の混同と取り違えに至る——を探し求めると、この連関は不確かで謎めいたものとなる。思考と発話を区別する従来の通例的な方法

によれば、両者は互いに区別され、否定し合う。しかし、まさにそのためにまた両者は、それらの連関を作り出すことが重要なきには、混合によって合一され、互いに述語づけられるのである。区別に際しては、そのようなものとしていかなる発音された音声でもない思考と、そのようなものとしていかなる思考でもない発音された音声だけが思い浮かべられる。これに対して合一に際しては、一方では発音された音声が発音された思考を欠いてはいないだけでなく、また思考によってのみ思考記号、発話された音声、言葉であるということ、他方では思考が発音された音声を欠いてはいないだけでなく、また発音された音声によってのみ意識のうちに現れる思考、思考する表象、表象された思考であるということを隠すことができない。したがって、そのようなものとして意識のうちにある思考と、意識における思考の表出である発話は、互いに互いを前提するだけではない。両者は互いに移行し合い、ただ混交してのみそれらであるのである——そして、大気中の空気を構成するガスの種類の差異がそれらの合一において失われるわけではないように、両者のこの貫通性（完全な混合）において、両者の差異が失われるということはまったくない。

化学はガスの種類の差異をそれらを分離することによって表出する。しかし、哲学的分析は、その従来の方法では、思考と発話の差異を学問的に提示することができていない。自然哲学的思弁によって思考と発話の無差別性の直観を享受するのではなく、この無差別性についての思考の欠如によって思考と発話の本質的差異を信じること、そして、それによってこの本質的差異が不明瞭にされたり廃棄されたりせず、むしろ明らかにされて保持されるような思考と発話の連関を信じることを余儀なくされる者——彼には、この差異と連関のうちに成り立つ思考と発話の関係を探究不可能な秘密と見なすか、いまだ十分には探究されていないものとして更に探究するか以外に選択肢は残されていないのである。

上述の関係において、いかなる分離であつてもならない差異といかなる混合であつてもならない連関が完全に判明には提示されていない限り、全関係はなお解明されていない謎であり、次のこともおそらくまだ不確実であろう。すなわち、ギリシア語による弁証法や論理学という命名によっては思考と発話の連関または一様性のどちらが暗示されているのか——そして、ドイツ語による理性論や思考論という命名によっては思考と発話の差異または分離のどちらが暗示されているのか。

語法

思考と発話の関係はしかし、既知で確定的なもの、あるいは探究不可能なもの、あるいはこれから探究されるべきもののいずれかとして想定されるので、この関係はこれらの場合のそれぞれにおいて所与のものとして、そして現実的に語法のうちに含まれたものとして前提される。そして、常にこれらの三つの意見のうち一つを他の意見に対して擁護しようとする者は、とりわけ次のことをはっきりと申し立てる必要がある。すなわち、語法ということで何が理解されており、何が理解されるべきなのか、ということ。

私たちと母語を同じくする仲間たちの中でも思慮深い人々の間で今日支配的な見解によれば、語法の本質は思考の相互作用と、特定の考えに特定の語を付き添わせる習慣のうちに存するのであり、その際には思考と習慣は相互に依存し合い、片方が他方を前提し、両者は入り混じって制約され、規定されており、そしてまさに両者の混交が発話における思考の使用と思考における発話の使用を形成しているというのである。

それにもかかわらず、この見解の支持者は、両者の混乱や混同、取り違え、誤った語法、言語の現実的な濫用にすぎない発話と思考の混交もあるということを否定できないし、否定しようもしないだろう。あらゆる身分の大衆の、共通かつ通俗で思慮を欠いた語法では、他人の口真似をする人に対して外から自らを強要する従来の習慣が、思考を名乗り、語の意味を規定するものである。或る学派による、哲学的と称しているが実際にはソフィスト的で個別的な語法では、指導的な立場にいる者の空想と恣意によって取り入れられ、彼の名声と器用さによって押し通された習慣が、高尚な思考という仮象を取り入れ（それが現実的な思考でないことは顧慮せずに）、共通語法の改良を称するものであるが、それが普遍的語法から、それを越え出ていくことによって逸脱すること——普遍的語法に劣る共通語法が逸脱しているのと同じほどに——は顧慮されないのである。通俗的語法においても個別的な語法においても、思考と習慣は相互に奉仕し合い支配し合っているように、それゆえに両者が等しい権利を有し、行使しているように見える。それにもかかわらず、習慣に仕える思考はまさにそのために思考の仮象にすぎないこともありうるのであり、その際には、思考に仕えるように見える習慣は現実には思考を支配するのみであり、思考をそのようなものとしてはまったく生じさせず、語ることを許さないのではあるが。

現実的思考と仮象的思考、想像的思考の本質的差異、そして普遍的語法と通俗的語法、各々の個別的な語法の本質的差異が否定できないほど明白になくなくてはならないのであれば、現実的に思考する普遍的語法の特有性は、ただ習慣の上に立つ思考の下にある習慣の従属のうちにのみ同様に否定できないほど明白に存しうるのであり、その際には思考は支配だけをし、習慣は仕えるのみであり、思考のみが規定根拠であり、習慣はこの根拠によって規定される制約にすぎないのでなければならず、両者のいかなる相互作用も決して成立しえない。

これに対して、確かに他方では習慣と空想や恣意との間では本来的な相互作用が可能かつ現実的である。習慣の特有性、頻繁な反復によって成立する熟練さは、矛盾なく空想や恣意の或る種の諸活動へと移行し、それらは矛盾なく習慣の特有性、熟練さへと移行する。両者は入り混じって仕事熱心であり、まさにこの相互作用によって習慣づけと、変化した習慣づけによる習慣づけ——それにおいて古い習慣と新しい習慣は、それらが思考の立場に取って代わることにより、思考に対する優位を主張する——が存立するのである。

とりわけこのことは、その内容がいかなる感覚的な性質や計量可能で数えられる量でもない諸概念において起こる。ここでは語の意味がいかなる像や図形、数字によっても支持、そして保持されないので、概念の記号はただ単に発音された音、像を欠いた語へと帰するのである。数学、そしてフランス人によって厳密という名称で際立たせられるのが常であり、その対象が外的経験の領域において生まれ外的直観によって到達できるようなあらゆる学においては、語の意味は図形や数字、現実的な像の援助によって未規定性や揺れから守られており、空想と恣意の不当行為は感覚能力の証言という明証性によって打倒されるのである。それゆえに、上述の諸学はまた疑いの余地のない確実性、確かでは是認された進歩、人間の生の外的な重要事への明らかな影響力を享受することになる——他方で、直観を欠いた諸概念や、像を欠いた諸語、揺らいだ語の意味でやりくりしなければならない存在論、形而上学、思弁的哲学は、それらに通じた人々のもとでさえ議論の余地があり、厳密な諸学の洞察力に富む多くの論者からは、その全本質が空虚な言葉のうちに存すると非難されるのである。

§3

存在論における語法

ギリシアにおけるプラトンとアリストテレス以降、おそらくいかなる時代、いかなる他の民族においても、哲学の特有性について彼らと同様の真剣さや熱意をもって哲学されたことはなかったであろう——カントによる理性批判の出現から今日に至るまでのドイツを除いては。それによってこの時代が哲学史にとって重要なものとなるところの学としての哲学の可能性に関する討論において、思考と発話の関係や哲学をする際の語法がまったく考察されておらず、話題にされていないということは否定できない事実であり、言及されることも少ないが、注目すべき事実である。思弁哲学の領域における定まった思考記号の欠如や、思弁哲学の不可欠で広く用いられている諸語の多義性、個別的な語法が多数あり相違していること、あらゆる従来の試みの現実的な主要欠陥、哲学の学問性の本来の主要障害は、「序言」において引用したヤコービの示唆を除けば、新たな改革者のなかのいかなる者によっても言及され、咎められ、重要なものとして認められてはこなかった。しかし、まさにそれゆえにこれらの問題点はまた上記の討論の経過と帰結において、それらの混乱させ、欺き、不和をもたらす作用のうちでいつそう妨げられず、際立って現れることとなった。批判主義の学派が、反对者に対する優位を短い間主張した後で、互いをも批判し合うその信奉者たちによってすぐに解体されてしまったのと同様に、無差別論の学派もすでに、その主唱者と代弁者のきわめて多様かつ顕著な差異によって、中心人物と構成要員とに分離されてしまっている。新旧の学派における内部からの争いにしろ外部からの争いにしろ、そしてまた各々の学派や学派一般に対する個々の独立した思想家の論争的声明にしても、様々な個別的な語法の間で無意識の言葉をめぐる争いへと帰着するのである。互いをもたらし合い、排除し合う体系の各々は、その独自の言語（用語）を持つ。体系の転換は、まずもって言葉とその意味の転換によってのみ支えられる。そして、哲学における勝利や戦いとは言葉の転換に他ならないのである。

或る学派がまとめ上げている合意は、特定の強調されて際立たせられた言葉の単なる一様性のうちに存するのであるが、それらの意味は師と弟子にとってはあらゆる探究を超えた、あらゆる探究の原理として崇高に思われ、そのためにまた探究されないままとなり、もっぱら直観されるにすぎない。そのような言葉はこの地位へと、いずれかの優れた頭脳による空想と恣意の魔力によって、そしてそうした頭脳とその受け売りをする崇拜者や弟子たちの頭脳における無数の反復による習慣づけの寄与によって達するのである。彼らは自らの優位を、学派内外の同様に力強い他の頭脳が、頂点に立っている魔法の言葉について隠された矛盾に気づいて指摘し、いまや魔力を失

った言葉の代わりに他の言葉を提唱する器用さと幸運を持つまで主張するのである。
「慣用が望むならば、いま名声を誇っている言葉も滅びるだろう。言葉についての決定を下し、法と規範を定める権利は慣用の手中にある」¹¹。

§4

思考論における語法

しかし、それにもかかわらず直観を欠いた概念と像を欠いた言葉も遍く認められた語法を許容し、それらが現実的に遍く認められるということ、そしてそのような言葉の確固とした意味もありうる（そして、現にある）ということについては、遍く認められた思考論、論理学が重要かつ今日まで反論のない実例である。この学は、一方では確かに概念における直観の欠如性と言葉における像の欠如性を存在論（形而上学）と共有している——他方ではしかし、それにもかかわらず、概念の確固さと言言葉の意味の遍く認められる性質を厳密な諸学と共有してもいるのである。論理学は、自身の領域でその根本命題と諸命題について自ら一致し、外部から論難されることはなく、その主要命題の真理性に関する内外からの各々の疑念には抵抗しながら、カントがきわめて的確に述べたように、アリストテレス以来、本質においてはいかなる前進も後退もなしてはいない。存在論の領域でのあらゆる諍いや変革において、そして厳密な諸学の領域でのあらゆる進歩と改善において、論理学の内容を形成する従来の通例的な思考形式は、論理学の所有物と外見が主要部分においては変わらず持続していることによって、いかなる本質的改善にも適さず、必要としていないことを示したのである。

論理学のこの優位性の根拠については、古来の論理学者たちのもとで問われることはなかった。彼らは以下の事柄を自ずから理解できるものとして想定していたのである。すなわち、確かに仮象的思考、誤解された思考、想像された思考もあるのではあるが、思考としての思考、現実的で想像されたのではない思考は変遷せず、誤ることのないものであるということ。思考する理性以外には、いかなる理性もありえないということ。思考する表象だけが理性的な表象であるということ。そして、この表象が少なくとも論理学——その表象そのものの学としての——においては、空想および恣

¹¹ ホラティウス『詩論』70–72.

意と習慣の相互作用に特有の変遷性に対して、その表象に帰属する優越性を主張するに違いないということ。

それに対して、私たちと言語を同じくするより新しい論理学者や現代の論理学者は、論理学の普遍妥当性、自立性、改善不可能性の根拠をこの学にのみ特有で、この学の領域でのみ生まれる思考——あらゆる内容を取り去った思考の形式に関係し、それゆえに形式的思考である（そしてそう呼ばれる）思考——のうちに探し、見出している。実際に、これまでの論理学によって立てられた思考形式もその内容の欠如性によってのみ普遍的に妥当するのである。そして、この内容の欠如性は柔軟さ、しなやかさ、扱いやすさによって最も反論の余地がないものだとして立証される。この柔軟さ、しなやかさ、扱いやすさとともにかの諸思考形式はその使用において、思弁的表象や共通的表象の非常に異なる内容それぞれに結びつき、それらの思考形式は互いになおきわめて矛盾し合う存在論の体系の各々において、そしてなお非常に異なり流行とともに移り変わる普通の人生の重要事に関する見解の各々において、同じ仕方で貢献する能力があり、目的に役立つ。そして、それらは現実的に今日に至るまで数学を除いては唯一のドグマをなしており、少なくともそれらについて、哲学する理性の主唱者たちは、普通の人間知性の主唱者たちとだけでなく、自分たちにおいてさえ意見が一致しないときでも不和に陥ることがないのである。

周知のごとく、かの思考形式の特有性に関する知識に至るには短く快適な道がある。すなわち昔から異例のことではなく、カントによる理性の批判によってより明確に言語化されたにすぎないが、それ以来ドイツの論理学者や思弁的哲学者たちには完全に馴染みのものとなった、思考可能なもののあらゆる差異、思考のあらゆる対象、考えのあらゆる内容を見捨てること、という道である。見出されるべき形式は、差異を見捨てることにおいて、そしてこの見捨てることによって探されるのであるから、もちろんその形式はこの見捨てることの後に残るものを見やることにおいて、かの無差異（無差別）としてのみ現れるのであるが、それは思考の根本形式として通常は、一性とか、一様性とか、合一とか、連関とか、合致とか、一致といった名称（「言葉において私たちはなんと軽率になることか！」）で解され、呼ばれている。この無差異こそが、これらの名称の根底に共同的に存するもの、これらの名称の根底において思考形式をなすものに他ならず、それによってこれらの名称は、可変的なものと不可変的なもの、現象と有それ自体、偶然的なものと本質、想像されたものと現実的なもの、偽なるものと真なるものに等しく適合するのである（そして、そうでなければならない）。

それゆえまたこの形式は、ただ可變的であることも、ただ不可變的であることもできない。その本質は、不可變的な可變性と可變的な不可變性のうちに存するのであり、この本質の特性は形式の内容の欠如と内容の欠如の形式のうちに存する。

もちろん遍く認められた論理学は、その思考のこの根本形式の力において、図形や数字、像、感性的な明証性によって十分に保証されているかの諸学の進歩を妨げることも促進させることもできなかった。しかし、形而上学の領域での変革や争いについては、論理学はいっそう無罪というわけにはいかない。論理学はそれらにおいて、絶え間ない誤解を廃棄も妨げることもできないというだけでなく、むしろ誤解をもたらし、保持し続けているのである。プラトン以来の形而上学が徹底性と確實性において何も得ず、それだけにいっそう多くのものを反対に失ってきたのだとすれば、形而上学はこのことの責任をただ、プラトンの弁証法から逸脱したアリストテレスの論理学、そしてこの論理学から生じる遍く認められた思考論に帰する必要がある。この思考論は公には思弁の各体系の役に立つが、ひそかにあらゆる体系の転換を支配し、各学派に賛成してあらゆることについて共有的な誤解を築いては覆い隠し、思考の立法を遂行しては保持しているのであり、経験主義と理性主義、および懷疑論と独断論は同じ権利と幸運をもってこの立法を引き合いに出すことができるのである（そして、できなければならない）。

懷疑論と独断論、および独断的经验主義と理性主義は、いまではほぼ一般的に考えられているように、従来の通例的な思考形式の誤解や濫用によって生じ、存立するのでは決してなく、現実的にはただこの思考形式それ自体そのものの性質によって生じ、存立するのである。そして、この性質の根本的誤謬、論理的形式の内容の欠如の本来的な本質は単に、反論のできない、また知られていないその多義性のうちに存する。しかし、この多義性は目下のところまだまったく知られていないか、ただ上辺だけ言及されているかのどちらかであるということ、この多義性が本来そうであるものとして、すなわち遍く認められた論理学の現実的で本質的な根本的誤謬としては、ほぼすべての人にとって、ありそうもない、信じられない、不可能なものとして現れ、とりわけ私たちの根っからの論理学者たちには嘲笑すべき、顧慮するに値しない非難として現れるに違いないということは、以下の事柄からのきわめて自然な帰結なのである。

第一に、思考可能なものの差異（いわゆる内容としての）を無視することと、思考可能なものの無差異（いわゆる形式としての）を見やることからの——したがって、そのうちに思考形式の通例的な認識手段が存立する非論理的な抽象からの帰結であ

る。

第二に、仮象的規定性、安定性、有用性からの帰結である。これらは、厳密な諸学における従来の思考形式から、その多義性をこれらの学の領野で図形、数字、像、感性的な明証性によって和らげることで不正に得られたものである。

第三に、そして主要な点として、諸語の同義性からの、とりわけ不可欠で最も広く用いられている諸語——それらの語によって、上述の思考形式の一部は直接的に、一部はその解明においてしづけられるのである——の同義性からの帰結である。

まさにこの同義性——そのうちに思考形式の隠された多義性の本来の秘密、そして無益にも探された哲学の学問性の本来の秘密が含まれ、提示されている——がこれまでまったく顧みられていないか、あるいは少なくとも探究されないままになっているということには、同義性の概念のこれまでの未規定性そのものがきわめて本質的かつ容易に証明可能な仕方に関与しているのである。

§5

同義性、類義性、同名性

アリストテレスにおいて（『カテゴリー論』第一章）、共通の名前だけでなく、一様な本質も持つものが同義語と呼ばれる。これに対して、共通の名前を持つが一様な本質を持つものは、アリストテレスにおいては同名異義語と呼ばれる。同義語の例としては動物という語が挙げられるが、それはこの語が人間と雄牛を指し示し、その両者において同じ仕方で定義されなければならない場合のことである。同名異義語の例としても同様に動物という語が用いられる。しかし、それはこの語が現実的な動物と絵に描かれた動物を指し示し、まさにそのために異なる仕方で定義されなければならない場合のことである。したがって、単なる同名性は同義性と同名異義性において共有的であろう。しかし、同名性が概念の一様性と結合されていれば、それは同義性の特有性であり、同名性が概念の相違性と結合されていれば、それは同名異義性の特有性である。疑いの余地なくアリストテレスは、彼が同名異義語と呼んだ諸概念が、それらの内容のあらゆる相違性において或る種の親縁性を持ち、その親縁性が同名性を付与するということをきわめてよく知っていた——このことは、現実的な動物と絵に描かれた動物の例においてもきわめて明白である。しかし、アリストテレスが同義語という語で、決して単なる親縁性ではなく、同名の諸概念の一様性だけを理解させ

ようとしていることにも疑いの余地はない。

これに対して私たちの現代的な語法では、同義語という語は概して類義性だけを、とりわけ異なる諸語の意味の間にある類義性だけを意味する。そして同名性——これをアリストテレスは同名異義性のために要求するのと同様に同義性のためにも要求する——は、同義語から除外されているように思われる。

エーベルハルトの『標準ドイツ語における類義語の批判的哲学的辞典 第三部』(ハレ、ルフ書店、1798 年) 295 頁においては、「その意味が顕著に異なるものではない」「諸語」が同意味のおよび類義的(共有的な意味での)と呼ばれる——「同意味の」

(この語に特有な意味での)とは「その意味がまったく異なるものではない諸語であろう」——「それに対して類義的であるとは、それらの意味の差異が概念の綿密な分析なしには判明に説明されえないほどわずかであるような諸語である」。「類義的な諸語は、それゆえに類似した意味を持つ。しかし、この類似性は、そのうちにいかなる相違も認められないというほど大きくはない。このことは、類義的という語によってきわめて的確に表現される」。確かに同書第一部の前に置かれた「同義語論の理論の試み」では、同じ語の異なる意味の間に類義性はないということが、はっきりと述べられているわけではない。しかし、この論文および著作全体は、異なる諸語の間の類義性だけを扱っている。その限りにおいて、それらがもたらし保持する類義性の概念は、彼がこの名称を異なる諸語の意味の類似性に制限することによって、アリストテレスにおける同義性の古い概念——彼はこの名称を同名の諸概念および同意味の諸語に限定したのであった——と同様に、きわめて狭いものとなっている。

異なる諸語の意味が、それらの近しく未規定に表象された類似性のためにしばしば混同されたり取り違えられたりするのと同様に、語法がそれらの類似性のために一様な語によってしるしづけるのが常であるような諸概念の差異がまさにこの一様性によって見落とされることも珍しいことではない。同じ語の親縁的な諸意味の未規定性によって引き起こされる無意識の誤解や、言語の混乱、言葉の争いは、それらが異なる諸語の未規定な親縁性から生じる場合と同様に頻繁なものであり、認識にとって不利なものである。そして、とりわけ直観を欠いた諸概念や像を欠いた諸語を考慮すると、いかなる同義語論も、それが同名の諸概念の内容の特有性を明確に提示できない限り、類義的で異なる諸語の特有的な意味を確定することも決してできないだろう。

というのも、かの異なる諸語の特有性についての説明においては、それらの親縁性が同名の諸概念によって述べられるからであり、それらの諸概念は実際にそれ自体ま

た類義的であるにすぎないが、それらの親縁性の未規定性において、そしてそれらの同名性のために同意義のものとして解されているのである。例えば、アリストテレスが一様性、類似性、同等性といった語の特有性を挙げようとする際、彼は一様性を本質の一性によって、類似性を性質の一性によって、同等性を量の一性によって説明する（「同一だと言われるものどもはそれらの実体の一つだからであり、同様だと言われるものどもはそれらの性質の一つだからであり、等しいと言われるものどもはそれらの量が一つだからである」『形而上学』¹²）。しかし、一性という多義的な語および同名的な概念によっては、一様性、類似性、同等性の概念の親縁性は説明されず正しく提示されないのであり、それはこれらの諸概念の特有性が本質、性質、量といった語によっては説明されず正しく提示されないのと同様である。アリストテレスに対して、次のことを彼が十分に意識しており、ここでは忘れていたにすぎないと示すことは難しいことではないだろう。すなわち、一様性は本質にのみ特有なものではありえず、一様性のみが本質に特有なものではありえない。というのも、等しい本質、類似した本質もやはりあるのだから。同様に、性質の一様性や等しい諸性質も単に類似した諸性質と並んであり、量の一様性や類似した量も等しい量と同様にあるのである。

エーベルハルトの辞典は、同等性と類似性の概念の親縁性を表現するために、アリストテレスが使用した一性という語の代わりに、一様性という語を選んでいる。そして一様性という語は周知のこと、確定的なこととして解されているのである（第三部291頁）。すなわち、「学問的な言語において、一様な量を有する諸物は等しく、一様な性質を有する諸物は類似している」——もちろん、或る特殊な、数学者たちに特有な語法では、類似性という語の意味は図形と数字の量が等しくない場合におけるそれらの等しい性質へと制限されている。そして、異なる量を持つ同種の図形や同名の数字を類似していると呼ぶのである。それによってこの語法は等しいという語の意味を、図形と数字の性質が等しくない場合におけるそれらの量の同等性へと限定するように強いられている。しかしながら、数学の個別的な語法を除き、類似性と同等性という語の根源的で特有な意味において、類似性は決して量が等しくない場合の等しい性質を意味しないのであり、同等性は決して量の特有性を意味しないのである。同等性はそのようなものとしては、言うまでもなく数多性における一様性である。しかし、数多性はそのようなものとしては、表象における量および集合との混乱と矛盾によっ

¹² 1021a. 訳文については、下記邦訳から引用させて頂いた。出隆訳、アリストテレス『形而上学（上）』、岩波文庫、1959年。

てのみ取り違えられうる。そして、数を欠いた数多性だけでなく量を欠いた数多性もあり、同じものであるように考えられなければならないということが帰結において判明に示されるだろう。これに対して類似性は一様性でも同等性でもなく、特殊なもの、その特殊性における隣接、親縁性、接近（親和性、近似）にすぎない。だから、例えば個々の人間の特殊性は類似性と対比だけを提示するのに対して、人間の本質は普遍的にいたるところで等しい諸性質を有する。

さらに際立つことに、類義的で異なる諸語の説明に混乱をもたらす同名の類義的諸概念の影響は、普遍的と共有的という同義語の例において解明されることができる。この普遍のおよび共有的という語は、エーベルホルトの辞典では（第三部 238 頁）、それが共通的と普遍的という語を取り扱い、その直後では共有的と同時的という語を取り扱っているため、黙殺されている。疑いの余地なく、著者には普遍的と共有的という語の類義性がすでに共通的という語によって十分にはっきりと述べられていると思われたのである。確かに、この共通的という語は普遍のおよび共有的という語の両方に含まれる構成要素であり¹³、両者においてまさに同じことを意味するように思われるが、それにもかかわらずそれは同名の概念および類義的な語でのみありうる。両者の本来の意味は本書の「序言」でさしあたって提示されており、帰結においてより詳細に展開されるだろう。

§6

第一の諸根幹概念における、それらのしるしづけの類義性と同名性による混乱

一性と一様性という類義的な語、およびそれらに次いで相違と差異という語は、とりわけ思考論と存在論において不可欠かつ広く用いられている語であり、最も不可欠なもの、最も広く用いられているものである。これらの語によってしるしづけられる諸思考形式はあらゆる思考形式のなかでも最も重要なものであるが、それというのもそれらは自身よりも高い思考形式を持ちえず、あらゆる他の思考形式を自身の下に持たなくてはならず、それらの影響は例外なくあらゆる思考可能なものへと及ぶからである。これらの諸語が多義的で曖昧であるとすれば、それらの多義性と曖昧性は、それなしでは、そしてそれの前には、いかなる他の多義性や曖昧性も根本からは見出さ

¹³ 注 10 を参照。

れえず、取り上げられえないようなものである——しかし、頻繁に起こるように、一性を個別性と、一様性を同等性と取り違えてはいないのだとすれば、一性と一様性という語によって何を理解しているのか、一度自ら思案してみてもらいたい。そしてこれまで、一性と一様性という語の意味を互いに区別してきたのかどうか、どのように区別してきたのかを自ら問うてもらいたい。これらの語をとときには同意味のものとして、ときには類義的なものとして想定し、主張してきたこと、そしてそれらの本来の類義性についてはまったく無知で不確かであることを告白せねばならなくなるだろう。しかし、これら二つの語の各々がその固有の意味の未規定性において、同時に他の部分の意味の未規定性も引き受けることにより、これらの各々は二義的となる。しかしまた、一性と一様性という語の多義性は、それらの語および相互にそれ自体類義的な諸語の集合および相違性とともになお広がるのである。そうした諸語とはすなわち、個別性と同等性、普遍性と共有性、同等性と類似性、連関と合一、合致と一致などであり、それらはその意味において、ときには相互に定まった仕方でのみ、あるいはむしろその未規定性によって不確かな仕方でのみ接近し合うが、ときにはしかし、また再び一様になることを目指すのである。同様の多義性はまた相違と差異、区別と分離、対置と前提、多様と変転、数多性と量などの諸語、そしてそれ以外の、それによって遍く認められた思考論がその思考形式をしるしづけ説明するあらゆる語や、それによって形而上学的体系がその最初の諸前提、根本概念、絶対的直観を表現するあらゆる語にも伴っている。

一般論理学の私たちの教科書の最も主要な内容をなしている説明のもとで、とりわけ一性と一様性という語の説明や相違と差異という語の説明を探し求めても無益だろう。それらの意味は、それ自体によって確立されている自明なものとして、昔からいたるところで知られている確定的なものとして、疑念と誤解を超えたものとして、暗黙裡に前提されているのである。しかし、実際に今日までこれらの概念の意味を欠いた音と文字だけが（文言ではなく、語だけが）確立していること、これらの語の意味が変転し揺れることを決してやめなかったこと、そして語彙全体のそれ以外のあらゆる語のなかで、より説明能力があり、より説明を必要としているものはないということは知られていない（そして、知られていないままにとどまる）。なぜならば、上記の諸語の多義性は、きわめて古く、深く根ざし、広く普及した習慣によって、知覚から完全に引き離されているか、あるいはそれどころか知覚において正当化されているからである。吟味されず、研究されず、討論されることもなく、これら四つの最も重

要な語は、普通の人生の言語から、思考論と存在論の言語へと忍び込んだのである——それらの自ずからもたらされる未規定性を造語や慣用句、方法の背後に隠しながら、数世紀に及ぶ長い期間においてそれらの語を使用してきた著名な哲学者たちの名声によって通俗的な無思慮を疑うわずかな疑念をもますます克服しながら。これら四つの最も重要な語においては、共通的で暫定的な語法、探究に先行する語法が、まだ知られていない、まだはっきりと言葉にされていない普遍的語法の権利と所有地へと現実に入り込んだのである。

§7

アリストテレスのカテゴリー

人間的認識の諸根幹概念と称されるものの一覧表において、他のあらゆるもののなかでも最も知られており、遍く認められた論理学へのその影響によって最も重要である、アリストテレスの十のカテゴリー表においては、かの四つの最も重要な根幹概念が完全に黙殺されている。

十のカテゴリーを立て詳細に論じる論文は、このスタギラの哲人の「オルガノン」と総称される本来は論理学的な書物に数えられる諸著作の先頭に置かれるものである。それは、同名異義語と同義語という上述の区別から出発する。続いて、語の使用法について、語の結合のうちにあるものと語の結合の外にあるものとを区別する。そして、このことから次のように確言するのであり、また確言するだけにとどまるのである。すなわち、「それ自体において、結合の外で考察された各々の語は、実体、量、性質、関係、時間、場所、態勢、所持、能動、受動のいずれかを表示する」(ブーレ編『アリストテレス全集』第一巻、1791年、449頁)と。最初の四つの概念について個別の章でその意義深さと有益性が述べられた後で、残りの六つについては次のように確言される。「これらについては十分に知られているため、すでに(先行する箇所です)述べた以上に述べることはない」と¹⁴。これに対して、後続の章では付随的、あるいは事後補足的に、対立、前時、同時性の種類、運動(あるいは変化)、所有の種類につ

¹⁴ 『カテゴリー論』第九章末尾の文言であるが、この箇所は後世になって挿入されたものと推定されている。中畑正志訳『カテゴリー論』(『アリストテレス全集 第1巻』所収)、岩波書店、2013年、69頁、注2を参照。

いても取り扱われる¹⁵。これら五つの概念は、アリストテレスがカテゴリーに関する自らの論文に付け加える必要があると認め、それにもかかわらず十のカテゴリーの地位や称号が与えられなかったものであり、また注釈者たちによって「メタ・タス・カテゴリーアス」や後賓位語という呼称で呼ばれているのであるが、これらに加えて後続の箇所ではさらに別の五つの概念が付け加えられる。すなわち、類、種と個別性、差別、特有性、偶然性の概念である——これらは前賓位語、「カテゴリーメーナタ」、客位語といった呼称を与えられ、ポルピュリオスは『イサゴーゲー』——『オルガノン』の古い写本や印刷された版に付されているのが通例である——において、正当にも次のようにして、これらについて確言している。すなわち、これらの諸概念なしには、アリストテレスのカテゴリーは十分に納得のいくものにはならないであろう、と。しかし、ポルピュリオスの差別に関する含蓄に富んだ叙述——すなわち差別を、それによって何か或るものがただ別様なもの、まったく同じではないものになるにすぎないものと、それによって何か或るものが別のものになるものとに区別し¹⁶、それゆえに差異と相違という語の特有性（その他の点では彼によっても誤認されているのだが）を少なくとも示唆する叙述——を除けば、このカテゴリーに関する手引書においても、差異と相違という語、そして一性と一様性という語についての説明の痕跡を見出すことはできないのである。

§8¹⁷

カントのカテゴリー

根幹概念と称されるものの最新の一覧表を、カントは『純粹理性の批判』において打ち立てている。それは二つの表からなるが、その一つは十二のカテゴリーを、もう一つは八の反省概念を含むものである。カテゴリーは量、質、関係、様相の四つに分類され、各分類の下にはそれらに特有的な三つのカテゴリーが包含される。すなわち、

¹⁵ 『カテゴリー論』の第十章以降を指す。注14に挙げた中畑訳『カテゴリー論』の解説では、従来偽書と見なされることが多かったこれらの箇所について、異なる見方が提示されている。

¹⁶ 『イサゴーゲー』第三節を参照。前者の差別についてポルピュリオスは、「動物」に「動く」という差別が付け加えられると「静止している」ときとは別様のものになるという例を挙げている。後者の差別は種差のことを指しており、「動物」に「理性的」という差別が付け加えられると別のものになるという例が挙げられている。

¹⁷ 原文では「§4」となっているが、明らかな誤植と判断した。

量：一性¹⁸、数多性、全体性、質：実在性、否定性、制限性、関係：実体性、因果性、相互性、様相：可能性、現実性、必然性、である。反省概念もまた四つに分類されるが、各分類の下には二つの概念だけが包含される。すなわち、第一に一樣性と相違性、第二に一致と対立、第三に内的と外的、第四に質料と形式である。カテゴリーおよび反省概念に選り抜かれ指名されたこれらの概念はしかしまた、現実にはそう呼ばれているにすぎない。単なる名称が何らかの語句に関する説明なしに、単なる語がその意味についての何らかのはっきりとした言明なしに、据えられているのである。そして、カントの『批判』はこれらの語の意味を完全に放置することによって、未規定で多義的な諸前提という古くからある誤った道を離れなかったもので、彼の批判はむしろその誤った道を改めて切り開き、これまでよりもさらに先へと進み続けるのである。

上記の『批判』においてはもちろん、一樣性が反省概念の下に、一性がカテゴリーの下に置かれることによって、一性は一樣性から際立たせられる。しかし、一性を他のすべてのカテゴリーと共有し、一樣性を他のすべての反省概念と共有するというこの際立たせ方は、これらの語の類義的な意味の特有性についてまったく説明していないのであり、「一樣性との区別において、一性ということでは一体何が理解されるべきなのか」という問いはまったく答えられていないままとなる。諸カテゴリーのもとで、一性は、数多性と全体性とともな単なる量の特色として登場する。それゆえその一性は、量的な一性と取り違えられており、質的な一性や、同様にまた絶対的で量を欠く一性があるということが忘れられているのである。個別性も同様にまったく忘れられたのか、一性と取り違えられたかのどちらかである。最終的には、数多性を超える一性や数多性そのものの内なる一性、そして個別性の内なる一性があるということ、そしてこれらの同名の一性は一樣な一性ではないということ——それらが単なる一樣性そのものではありえないのと同様に——が忘れられているのである。ところで、『批判』は多様な一性——分析的と総合的、超越論的と経験的、主観的と客観的、理性的一性と知性的一性等の名称によって区別される——によって、単なるカテゴリーとしての一性や単なる反省概念としての一樣性を指していたはずはなく、しかし一樣性と

¹⁸ ここまで「一性」と訳してきたドイツ語「Einheit」であるが、量のカテゴリーを示す「Einheit」に限っては「単一性」という訳を当てるのが通例である。しかし、ラインホルトはまさにそのような訳し分けが必要になる原因としてのカントにおける「Einheit」の多義性を批判しているのであり、量のカテゴリーを示す「Einheit」を「量的な一性」と言い直している。以降の記述からも読み取れるように、ラインホルトはカントのカテゴリーを問題にする本節においても「Einheit」を「一性」としてのみ使用し、カントに合わせて「単一性」として用いることはしない。それゆえ、本稿でも「Einheit」を訳し分けることはせず、一貫して「一性」と訳出した。

の区別における一性、一性との区別における一様性によって何を理解し、理解させようとしていたのかをどこにも提示しなかったのであるから、それは単に一性一般の未規定で多義的な概念にすぎない。この概念は、内容を欠いたその柔軟さによって、『批判』がそれらのもとでこの概念を登場させるところの、いくつもの特色や呼称に自分の名前を貸しているのである（そして、貸さざるをえない）。この概念のみが、そしてその後続く、同様に未規定で多義的な差異一般の概念のみが（相違と差異の特有性を区別することなしに）、カントの批判哲学においても、それに続く批判哲学に触発されたあらゆる哲学においても、主役を演じているのである。

根元哲学としての表象能力の理論やフィヒテの知識学、ブーターヴェックの論証学、シェリングの同一性体系、ヘーゲルの学の体系、ヘルバルトの形而上学の要点、フリースの理性の新批判、ケッペンの哲学の本質の描写等も、そしてまた思考形式に関するカント的見解から逸脱しているバルディリの第一論理学や、『19世紀初頭における哲学の状況を概観するための寄稿集』において試みたバルディリ的な理性的實在論の説明および基礎づけでさえ、同じ道を選んだのであった。すなわち、それらも一性と一様性および相違と差異という語の未規定性と多義性に無頓着であり、上記の諸語の二義性の影響——この影響は誰にも気づかれず、まさにそのために支配的である——によってそれ自体も二義的であるにすぎない諸前提と根本概念だけから出発したのである。

確かに『真理認識の不満足な探究者のための入門書としての真理認識の始原諸根拠』（キール、1808年）では、一性と連関という語や相違と差異という語の間にある未規定の類義性によって引き起こされたこれら四つの語の二義性を暴いて廃棄しようと試み、そしてそれらの語の規定された意味によって一性、数多性、全体性、同等性、普遍性、類似性等の諸語の特有的な意味も定めようと試みた。しかしながら、この試みにおいても著者はなお、一性と一様性という語の間にある、同様に未規定ではあるがはるかに重要である類義性を見逃していたのであり、それによって他の各々の二義性の根底に存する二義性には依然として言及していない。そしてそれゆえに、著者による上記の試みは核心において失敗したのである。

著者においてついに判明となった一性と一様性という語の類義性ととともに、次第に思考論と存在論において不可欠で広く用いられている他の諸語の類義性もまた著者には判明となった。それは、(1791年にイェナで刊行された)『哲学的知の基底について』という論考によって著者がそれまでに著したものよりもはっきりと論じることを

試みた研究について、予期していなかった新たな光を著者に投げかけたのである。彼にとって納得のいくものとなったのは、以下の事柄である。すなわち、上述の諸語についての同義語論が先行しなければ、求められる基底を探しても無益であるということ、しかし、その基底は探されることなく自ずから姿を現すのでなければならない——上述の類義的諸語の規定された特有的な意味が自らを表現するという点において、あるいは同じことであるが、これらの諸語の様々な個別的な語法や共通的で通俗的な語法から区別された、現実的に普遍的な語法が発見され、描出されうるという点において——ということである。

§9

哲学における普遍的語法のための同義語論の特有性

この同義語論が、それによって打ち立てられる語の説明において、通俗的語法やそうした語法によってのみ生起し存続する形式的思考論の弁証法的まやかしも、議論の余地があり争っている存在論の様々な語法のいずれか、したがって形而上学の独断的または懐疑的な見解や、批判的または絶対的な見解も基礎に置くことができないということは自明である。この同義語論は普遍的語法を、普遍的語法を誤認している個別的な語法や通俗的語法から区別することを企てるのであるから、それは言語を同じくする教養ある人々のうちに生き続けている精神の真理の感情——この感情は、自然な知性の現実的な健全さと、粗野や誤った教育からは遠く隔たった言語の修練によって現れるものであり、通俗的語法によっても、いずれかの個別的な語法によっても言い表されえず、決して言い表されることがないか、普遍的語法によってのみ言い表されうるかのいずれかである——を信頼している。もちろん、この普遍的語法は個々の研究者によって案出されることも、抑圧されることもできない。しかし、この語法は個々の研究者によってなおざりにされるか探し出されるかのどちらかであり、見誤られるか見出されるかのどちらかであり、明らかにされるか隠滅されるかのどちらかでありうる（そして、そうでなければならない）。この語法はまず、思考論と存在論における類義的な諸語と同名的な諸概念の意味の、気づかれていないが気づけないわけではない混同によって誤認されたのである。そして、それは間もなく、ついにはっきりとなりつつある上述の諸意味の区別によって、現実的に認識されることができるようになる（そして、認識されなければならない、そうなるであろう）。

普遍的語法の通訳者として、この同義語論は決して諸語の新しい意味を案出する必要はない。そうではなくて、ただ特有的な、そのようなものとして根源的で変転することのない諸意味——それらは昔から暗黙のうちに前提されていたが、まさにそのためにまだ一度としてはっきりと、それゆえ判明に前提されたことはなく、常にただ混乱して前提されていたにすぎない——を、それらの文字通りの、はっきりとした、判明な表現によって、暗闇と混乱から浮かび上がらせることだけが必要なのである。この同義語論の内容を構成する語の説明を理解し、真であると見出すために、読者には以下のことだけが必要とされる。すなわち、類義的諸語と同名的諸概念の各々の家族において、或る語の意味を、その語と親縁的である他の語の意味との関係において熟慮すること、相互に比較された諸語によって自らの位置を定めながら、諸語のうちの或る語の意味について自分自身と一致すること、一部は諸概念の同名性によって、一部は類義的諸語の相違性によって意識の十分近くにあり、それにもかかわらずこれまで非判明なままになっている諸語の意味の親縁性および特有性を判明な、すなわち区別する意識へと至らせることが必要とされる。

ここで、この同義語論がいかなるアルファベット順で並べられた辞典でもありえないということ、そしてそれはなぜなのかということが黙殺されてはならない。この同義語論によって説明されるべき類義的諸語および同名的諸概念は、ただ或る順序でのみ説明可能であるが、その順序は語の一文字目という偶然的性質によっては規定されえず、その順序にとって或る説明が他の説明の上位に置かれるのか、下位に置かれるのか、または並置されるのか、他の説明の前に置かれるのか後に置かれるのか、そして意識に至るのかどうかということは決して些細なことではありえないのである。ここでは、諸語に対してその意味によって割り当てられる序列のみが妥当しうるのであり、そのような序列とは相次ぐ諸語の選択と配列から偶然性と恣意を排除し、その必然性においては納得のいく、思慮あるものであり、先行する項目の各々および後続する項目の各々において、そしてそれらの項目の全系列においていかなる理解できないものも含まないような順序である。ここでは、その中心点が至るところにあって、その外接円がどこにもないような、いかなる神秘的な循環——この循環にとっては、或るものが別のものを生ぜしめるのは、それがその別のものによって生ぜしめられることによってである、ということがまったく矛盾とならない——も認められない。ここでは、諸概念のいかなる混交した説明、すなわち古くからの弁証法的循環——それにおいては或るものが他のものを前提するとともに他のものもその或るものを前提

しており、この循環からは「前提するものと前提されるものには、それ自体においていかなる差異も認められない」という前提によってのみ脱け出すことができる——のうちにあるいかなる説明も認められない。ここでは諸概念の、子孫が先祖に由来するのと同様に先祖がその子孫に由来しているような、いかなる相互的な由来も認められない。類義的家族を構成している個々の語の意味も、これらの語とは異なる諸家族の特有性も、相互に由来し合うのではない。そうではなく、常にただ後続するものが先行するものに由来するのみであり、その逆はないのである。そして、この同義語論はとりわけ、以下のことを判明なものとする。すなわち、あらゆる混交は、それが混合しうるものの混合を意味する場合を除き、表象における混乱、概念の混同に他ならないということ。

その下に他の各々の多義性が存立し、それなしには、そしてその前にはいかなる他の多義性も仮象的にしか発見されえず、廃棄されえないような多義性、すなわちあらゆる多義性のうちで最も根源的な多義性は一性と一様性という類義的諸語の多義性であり、様々な一性についての¹⁹同名的諸概念の多義性である。自らの上に他のいかなる家族も持たず、また持ちえないこの家族のあとには、まず直接に相違と差異という類義的諸語と様々な差異についての同名的概念が続く。後述される親縁性の表において立てられている残りの家族が、選ばれた順序でのみこれらに続きうる（そして、続かなくてはならない）ということ、そしてなぜそうなのかということは、以降の叙述において、そしてそれによって明らかにされる。

(くりはら・たくや 独日翻訳者)

*参考資料の収集にあたって、とりわけ愛知大学図書館よりご厚意を受けた。記して謝意を示したい。

¹⁹ 巻末の校正表ではこの「様々な一性についての」を「一様性における一性と一性それ自体の」と読み替えるように指示されている。